

JAALD

Bulletin of Japan Association of
Agricultural Librarians and Information Specialists

日本農学図書館協議会誌

No. 215 2024年9月

BioOne Digital Library は、生物学、生態学、環境科学に関する350以上の雑誌と電子書籍を提供するプラットフォームです。現在、BioOne Digital Libraryでは下記の製品が提供されています。

- BioOne Complete（電子ジャーナル・コレクション。年間購読）
- BioOne Complete Archive（電子ジャーナルのアーカイブ・コレクション。買い切り）
- ESA eBook Collection（電子書籍コレクション。買い切り）
- New in 2024: CSIRO Publishing BioSelect Collection（電子書籍コレクション。買い切り）

BioOne Complete

生物学、生態学、環境科学を中心に、150以上の出版社から200誌以上の電子ジャーナルを収録するコレクションです。

獣医学、植物科学、鳥類学、昆虫学など、幅広い分野の高品質なジャーナルへのアクセスを使いやすいプラットフォームでリーズナブルに提供します。

<https://bioone.org/browse/title>

ESA eBook Collection



アメリカ昆虫学会（Entomological Society of America）の書籍160冊以上を収録するコレクションです。

これらの書籍は2023年に初めて電子化され、BioOneでのみ提供されています。昆虫学者、動物学者、その他関連分野の研究者の教育的・専門的ニーズに対応するために作成されました。

<https://bioone.org/esa-ebooks>



NEW IN 2024 : Now Available!

CSIRO Publishing BioSelect Collection



CSIRO Publishing（オーストラリア連邦科学産業研究機構の出版部門）の書籍200冊以上を収録するコレクションです。

当コレクション(CSIRO Publishing BioSelect Collection)は、生物学の幅広い分野において、数十年にわたる信頼できる知見を提供します。

オーストラリアのユニークな種だけでなく、世界的な応用を伴う主要な研究成果も含まれます。

<https://bioone.org/csiro-ebooks>



BioOne 紹介ページ（日本語）：お問い合わせフォームもあります ➡

無料トライアル申込やお見積依頼、ご質問など、お気軽にお問い合わせください。



【日本総代理店】



お問い合わせ先：ユサコ株式会社 プロダクト部 BioOne担当

〒106-0044 東京都港区東麻布 2-17-12

Email: product@usaco.co.jp

特定非営利活動法人（NPO法人） 日本農学図書館協議会

ともに学び、変わる。未来へ続く図書館へ

日本農学図書館協議会 会員募集中

いま 世界的に 図書館運営が 大きく変わろうとしています
大学図書館 公共図書館 研究機関図書館 企業図書館 それぞれ
独自の取り組みが求められており 新しい運営が模索され 生まれています
当協議会は 農学図書館に限らず 各種図書館の先端的な取組みに関して
現場の図書館員に向けて 新鮮な情報を 会誌を通じてお届けしています
また 図書館運営・情報管理等に関するセミナーや見学会なども 開催しています
これからの時代を担う図書館員・図書館運営に関心のある皆様と
ご一緒に 次世代の図書館を創っていきたいと考えます
皆様の ご参加をお待ちしています

個人会員 5,000 円（年間）

団体A会員 10,000 円（年間）（大学・公共図書館、研究所など各種機関）

団体B会員 30,000 円（年間）（民間企業）

* 会員には会誌（年 4 回刊行）をお届けします

セミナー・見学会：会員特典あり

【入会方法】

入会申込書に必要事項をご記入の上、事務局宛に F A X，メールでお申込みください。

入会申込書(個人会員、団体会員別)はこちら↓からダウンロードできます。

http://jaald.life.coocan.jp/info_20230307/

特定非営利活動法人（NPO法人）
日本農学図書館協議会 事務局
東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学 教職・学術情報課程内
Tel, Fax : 03-3408-5077
E-mail : jaald@nifty.com

日本農学図書館協議会誌 215号 (2024年9月)

目 次

座談会：日本農学図書館協議会の歩みを振り返って ～1980年代を中心に、東京農業大学学術情報課程との関わり～ 会誌編集委員会	1
日本農学図書館協議会の歩み 長塚 隆	16
『東京農業大学学術情報課程1982年～2022年における40年の歩み』：教材としての顔 村上 篤太郎	21
事務局報告	24

Bulletin of the Japan Association of Agricultural Librarians and Information Specialists

No.215

September, 2024

ISSN 1342-1905

CONTENTS

Roundtable Discussion : Looking Back on the History of the Japan Association of
Agricultural Librarians and Information Specialists – Around the 1980s and the
relationship with the Scientific Information Course of Tokyo University of Agriculture

Editorial Committee on the Bulletin of JAALD 1

Milestones of the Japan Association of Agricultural Librarians and Information Specialists

Takashi NAGATSUKA 16

"Forty years of Scientific Information Course 1982 – 2022 at the Tokyo University of
Agriculture" : Role as a Teaching Material

Tokutaro MURAKAMI 21

Note from JAALD 24

座談会：日本農学図書館協議会の歩みを振り返って

～1980 年代を中心に、東京農業大学学術情報課程との関わり～

日本農学図書館協議会は 1966 年に設立され、今年で設立 58 年目を迎えます。当初は、任意の団体として農学系図書館事業の振興および農学情報の普及に取り組んできました。その後、2004 年 3 月には特定非営利活動法人として認定され、活動を継続しています。

日本農学図書館協議会は 1966 年の設立以降、その活動は大きく次のように区分出来ます。

- ① 1966 年から 1975 年までの第一期 創設期（古島敏雄会長（東京大学農学部図書館長）、1972 年より広野正一会長（農林金融公庫））
- ② 1976 年から 1993 年までの第二期 展開期（澤本孝久会長（慶応義塾大学文学部図書館・情報学科教授）、副会長：1976 年～1980 年 小野稔（名古屋穀物取引所）、1981 年～1987 年 佐々木敏雄（東京大学農学部図書館、1983 年から図書館情報大学助教授、1984 年から同大学教授）、1988 年～1993 年 葛城昭（東京農業大学図書館））、
- ③ 1994 年から 2003 年までの第三期 継続期（会長：葛城昭（東京農業大学図書館））
- ④ 2004 年以降 第四期 法人化以降期（会長：長塚隆（鶴見大学名誉教授））

本座談会では、1976 年から 1993 年までの第二期を担った先人の姿をもう一度振り返り、どのような思いで日本農学図書館協議会の活動に携わってきたのかを、この時期を知る座談会登壇者からお伺いすることで、この時期の日本農学図書館協議会の姿を多面的に明らかに出来ればと考えます。

この時期に、東京農業大学では学芸員課程が 1982 年に、司書課程が 1983 年に発足し、1984 年に司書課程と学芸員課程とからなる学術情報課程に改組されています。学術情報課程は理系大学での図書館司書養成という全国的にも数少ない試みであると言えます。

学術情報課程の教員としては、日本農学図書館協議会の活動に携わっていた澤本孝久会長の他に、葛城昭（副会長後に会長）が 1984 年の当初から、その他にも佐々木敏雄（副会長）、伊藤全（理事）、神谷淑子（事務局長）、長塚隆（現会長）などが参加していました。

特に、当時の日本農学図書館協議会の会長であった澤本孝久は 1984 年の当初から学術情報課程の教員として教育に関わり、発足に当たっても様々な形で関わっておられたのではないかと考えられます。また、学術情報課程を起ち上げる中心になられた吉村典夫教授は理事をされていました。

学術情報課程の発足にあたっての吉村典夫教授、澤本孝久会長、それを支えた佐々木敏雄副会長、葛城昭（副会長後に会長）などの諸氏がこの時期にどのような役割を果たされていたのか。どのような協力体制であったのかなどを少しでも明らかに出来ればと考えています。

また、理系大学での図書館司書養成という全国的にも数少ない試みのなかで、学術情報課程の発足後に、日本農学図書館協議会のセミナー活動などでどのような連携が行われたのかもエピソードを交えて明らかに出来ればと期待しています。

また、この時期には日本農学図書館協議会の事務局も東京農業大学図書館内に移転し、東京農業大学図書館や学術情報課程との連携も深まっていたのではないかと考えられます。これらの点もより明確になることを期待しています。

特に、本年は、日本農学図書館協議会の会長として第二期 17 年間を担われた澤本孝久先生の没後 30 年、学術情報課程創設に尽力された吉村典夫先生の没後 40 年にあたります。座談会登壇者から思いや考え方など、エピソードを交えて伺える機会になるのではと考えております。

■登壇者

座談会：日本農学図書館協議会の歩みを振り返って

- ・梅室 英夫氏（元東京農業大学学術情報課程准教授、元「食と農」の博物館副館長）
- ・惟村 直公氏（元東京農業大学学術情報課程准教授、日本農学図書館協議会副会長 2008 年 4 月～2022 年 3 月）
- ・下田 尊久氏（元藤女子大学図書館情報学課程准教授、日本農学図書館協議会理事・会誌編集委員長）
- ・高山 正也氏（慶應義塾大学名誉教授）

■モデレータ

- ・長塚 隆氏（鶴見大学名誉教授、日本農学図書館協議会会長）
- ・村上 篤太郎氏（東京農業大学学術情報課程教授、元日本農学図書館協議会理事・会誌編集委員）

■日時・会場

- ・日時：2024 年 3 月 18 日（月）13:00～15:00
- ・東京農業大学世田谷キャンパス 国際センター 2 階カンファレンスルーム 1

■その他

- ・人名の所属や一部の用語については括弧にて補足した。なお、所属名は当時の所属としている。



（座談会登壇者とモデレータ：左から高山 正也氏、梅室 英夫氏、村上 篤太郎氏、長塚 隆氏、惟村 直公氏、下田 尊久氏）

■日本農学図書館協議会と東京農業大学学術情報課程

長塚：今日は、ご参加頂き大変ありがとうございます。

本日の進行は、東京農業大学学術情報課程の村上さんと長塚で勤めさせて頂きしますので、よろしくお願いいたします。

日本農学図書館協議会は 1966 年に設立され、今年で設立 58 年目を迎えます。当初は、任意の団体として農学系図書館事業の振興および農学情報の普及に取り組んできました。その後、2004 年 3 月には特定非営利活動法人として認定され、活動を継続しています。

本座談会では、1976 年から 1993 年までの第二期を担った先人の姿をもう一度振り返り、どのような思いで日本農学図書館協議会の活動に携わって来られたのかを、この時期を知る座談会登壇者のみなさまからお伺いすることで、この時期の日本農学図書館協議会の姿を多面的に明らかに出来ればと考えます。

この時期は、オンラインで学術情報のデータベースが提供され、電子図書館の構想が語られ始めた時代でした。1986 年には学術情報センターが設置され、大学図書館も名称を 1990 年に慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスに湘南藤沢メディアセンターが、1991 年に早稲田大学が総合学術情報センターのように、図書館の名称を学術情報センターやメディアセンターなどに変えていった時代でもありました。

現在は、AI や生成 AI など新たな技術の利用も進んでおり、図書館業務のより一層のデジタル化を推進したいということで”図書館 DX（デジタルトランスフォーメーション）”が強調されております。



(長塚 隆氏)

このような時期に、1980 年代の人々の思いを振り返る中で、現在における変化への対応を考える一助に出来ればと考えております。本日の座談会では 1980 年代が中心になります。

皆さんが多分 20 代とか 30 代で、青壮の年代を過ごされていた時代に、どんなふうに考えていたか。その当時のことが、今の私達が生きている現代にどういうふうに役立っているのか、あるいは今後の展開のために、本日の座談会が実りあるものになればと思っております。

ここで、村上さんから登壇者のご紹介をお願いいたします。

村上：皆さん、こんにちは、おなじみの方ばかりですので、やりやすいというか緊張するといひますか、何とも複雑な気持ちはあります。今回、長塚先生と 2 人で、対応させて頂くことで私は非常に気が楽になりました。それでは、始めさせて頂きます。まず、皆様方から向かって右側の手前、下田尊久さんです。

下田先生は酪農学園及び藤女子大学情報センターで勤務され、その後、藤女子大学図書館情報学課程設置に関われ、長らく教えられました。日本農学図書館協議会の個人会員としては、多分、一番長く、日本農学図書館協議会のこともよくご存知ではないかと思っております。



(村上 篤太郎氏)

現在も、下田先生はラオスの中等学校における図書館活用のための研修などで活躍されており、お忙しい日を過ごしておられます。

次は、惟村直公先生であります。惟村先生は、東京農業大学のご出身で、学術情報課程の教員を長年されて来られました。最初は有給副手から、助手、講師、それから助教授、准教授、2023 年 3 月末で定年退職され、2024 年度から非常勤講師として、引き続き学術情報課程の授業に尽力し

て頂いております。先生は3-4日前にルーマニアから帰国されたばかりで、多少時差が残っていると仰っておられましたので、いいお話が出るのではないかとったりしております。

次は梅室英夫先生です。梅室先生は東京農業大学のご出身で、東京農業大学図書館の標本部で勤務されておられました。その後、学術情報課程の創設後は、講師、助教授、准教授として研究と学生指導に当たられました。現在は東京農業大学進化生物学研究所で、奄美大島など島嶼での研究を継続されておられます。

最後は、高山正也先生です。高山先生は慶應義塾大学の商学部を出られた後、文学研究科図書館・情報学専攻の修士課程を修了され、その後、東京芝浦電気で勤務された後、慶應義塾大学文学部図書館・情報学科で教員をされ、1985年から教授をされ、選定年退職された後、国立公文書館で常任理事、館長をされました。現在は慶應義塾大学の名誉教授をされております。

ちなみに私事ではございますが、高山先生のもとで修士論文を書かせて頂き、大変感謝をしている次第でございます。少し脱線をしましたけれど、以上で、まず登壇者の方の紹介を終わらせて頂きます。

■日本農学図書館協議会の歩み

長塚：それでは、「日本農学図書館協議会の歩み」をパワーポイントで簡単にご紹介させていただきます。

その後、村上さんから「東京農業大学学術情報課程」の紹介を簡単にさせていただきます。その上で登壇者のみなさまからのお話をお聞きしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(「日本農学図書館協議会の歩み」および「東京農業大学学術情報課程のご紹介」は、本号別原稿)

長塚：「日本農学図書館協議会の歩み」を振り返って、特に1980年代を中心に、東京農業大学学術情報課程との関わりを含めて当時の状況や考え方を理解し、現在に生かせればということが、今回の趣旨となります。

日本農学図書館協議会は1966年に設立され、今年、58年目を迎え、まもなく還暦となります。多くの先人に支えられて現在があり、歴史を再確認することで、今後の活動に生かせればと思います。当協議会は、農学情報の普及にいろいろ取り組んできました。2004年からは特定非営利活動法人(NPO)として活動して来しました。

会の活動としては会誌を年4回発行してきました。最初は「会報」の名称でしたが、1996年の101号を機に「会誌」と名称を変更し、現在の213号まで多くの号を発行して来しました。また、セミナー・講演会の活動も重視してきました。この3月1日には、第130回農学情報セミナー「大学図書館の最新動向を探る」が行われました。従来の130回の中には、学術情報課程との共催で開催したセミナーも数多くあり、東京農業大学図書館で学術情報課程学生のみなさんにも参加して頂いたことが何回もありました。

日本農学図書館協議会の活動は、上記のように、大きく四つの時期に分けることが出来ます。本日は、第2期にあたる76年から93年の期間に焦点を当てて進めて行きたいと思います。この第2期は澤本孝久先生が会長をされていた時期になります。登壇者の皆さんからお話を出して頂いて、そのことが現在の活動にも役立つものになれば嬉しいと思っております。

1994年以降の第3期では、東京農業大学図書館の葛城昭さんが会長を務められました。2004年の特定非営利活動法人(NPO)化以降の第4期では、長塚が会長を務めさせて頂いております。

日本農学図書館協議会は、1966年の戦後復興を經過して高度経済成長の時代に創設されました。伊藤全さんが書かれた創設時の経緯(『日本農学図書館協議会誌』N0.134, 1-9(2004))では、当時の農林省(1978年に現在の農林水産省：農水省に改名)研究所員であった石原さん、伊藤全さんが、図書館の担当になったことで、1962年4月から3か月、慶應義塾大学文学部図書館学科で「生物科学図書館現職者短期特別研修」に参加され、澤本孝久先生にお会いになられたのが、きっか

けになったとのことです。その後、今日、お話に出てきます東京大学農学部図書館の佐々木敏雄さんの3人で創設までの段取りをご相談され、多くの方の賛同を得て発足に至ったとのことです。

日本農学図書館協議会の発足時には東京大学農学部図書館長の古島敏雄氏が会長となられ、1971年まで務められました。創設時には農林省研究所の図書館関係者が、中心でスタートしたと言われています。

『日本農学図書館協議会会報』1号には、古島会長が発足にあたって、「図書資料は研究者にとって不可欠の研究資材の一つなので、それを使えるような状態をどうやって作るかが大きな課題になっている。課題を解決するには一つの図書館だけ、一つの大学だけでは実現できない。いろんな大学図書館や農林省研究所図書室が協力して行ける状況を推進していくために、協議会の意義があるのではないか」と書かれています。

第2期、今日のお話の中心になります。これは会誌の澤本会長追悼号に掲載された澤本先生のお写真です。澤本先生は1976年から1993年までという非常に長い期間、会長として、当時の活動の中心を担ってこられました。

この長い期間には、3名の方が副会長を担当されています。一番初めの時期は農林省関係の方である小野さんをご担当されていました。その次の時代ですが、80年代になって、佐々木敏雄さん、今日のこの後の話に出て来られますが、佐々木さんが副会長でした。大変残念なことに佐々木さんは、図書館情報大学の現職時に急逝されてしまいました。佐々木さんが亡くなられた後は東京農業大学図書館の葛城さんが副会長となりました。このようなこともあり、澤本孝久先生は、80代になられても会長の立場で日本農学図書館協議会の活動を支援して頂きました。



先日、横浜市鶴見区の総持寺にあるお墓に本日ご参加頂いている鶴見大学名誉教授の原田智子先生とお参りしてきました。

(澤本孝久氏:会長 1976年～1993年)

この時期における日本農学図書館協議会の活動ですが、現在とほぼ同様なところも多いのですが、農学や農学図書館に関連するセミナーや講演会を開催し、その時代の農学情報や農学図書館に関連する記事を会誌（当時は会報）に掲載していました。

その一方で、農水省関係の事業や日本科学技術情報センター（JICST）（現在の国立研究開発法人科学技術振興機構（JST））の事業に協力してきました。それから国際連合食糧農業機関（FAO）が作成するデータベースであるAGRISへの入力協力など日本農学図書館協議会の事業として行われて来ました。また、農水省で出版していた索引誌『日本農学文献記事索引』の配布に協力していました。

澤本会長の時代には、国際的な関係を踏まえて農学情報の振興を考えるということで、国内だけでなく海外との交流も盛んになってきました。国際農学図書館協議会（IAALD）に1978年に加盟しています。IAALDの世界大会を日本で開催することは、澤本先生の悲願でしたが、なかなかそう簡単ではなく、澤本先生がお元気なときには実現出来ませんでした。2008年に、本日ご登壇の惟村先生他、多くの方のご努力下東京農業大学厚木キャンパスを会場にIAALD世界大会が開催されたことが記憶に残っております。



(左から佐々木、澤本、右端は吉村の各氏：箱崎にて)

次は、副会長としていろいろご活躍された佐々木さんですが、東京大学農学部林学科を卒業後、大学に残られ林学の研究の他に図書館業務の改革にもご貢献されました。その後、図書館情報大学教授に転出され、東京農業大学学術情報課程でも教鞭を執られました。

東京農業大学学術情報課程の創設に関わられ、日本農学図書館協議会との関係の深かった吉村典夫先生ですが、写真にもありますように、1970年代に科学技術館に勤務されておられた時代から、澤本孝久会長、佐々木敏雄副会長とも交流が多かったようです。一緒に、台湾やフィリピンに出張して調査などをされてい

ました。
最後に、昔の会誌は非常にコンパクトな判型でした。この会誌の編集は農水省の方がかなり中心になって行われていました。永年、榎山進一さんが編集の中心になって貢献されていました。1986年までは、渋谷に事務所がありましたが、1987年には、日本農学図書館協議会の事務所を渋谷から東京農業大学図書館内に移転させて頂きました。これ以降、日本農学図書館協議会の活動と東京農業大学図書館や学術情報課程との関係がより緊密になっていったのではと思います。

1993年に澤本孝久先生がお亡くなりになられた後は、葛城昭さんが日本農学図書館協議会の会長を引き継がれました。

このように大勢の方が日本農学図書館協議会の活動と東京農業大学学術情報課程の両方に携わられてきました。本日の登壇者である惟村直公さんは学術情報課程が中心ですけれども日本農学図書館協議会で副会長として、長いあいだご活躍頂いてきました。今日は、登壇者のみなさまから、率直な思い出やご意見を伺い、1980年代の状況がより明確になることを期待しています。

■東京農業大学学術情報課程の誕生に向けて最初のかかわり

長塚：それでは、最初に本日の登壇者のみなさまの日本農学図書館協議会と東京農業大学学術情報課程との最初の関わりについて、簡単にご紹介頂けますか。それでは梅室さん、惟村さん、下田さん、高山さんの順でお願いいたします。

梅室：最初、東京農業大学の図書館に勤めたんですね。図書館の農業資料室の担当だったわけですね。その当時の図書館長大野史朗先生は、図書館は文字・実物・映像の情報が3本柱で、それらが三位一体となることが大切とお考えでした。図書館は図書部、標本部、視聴覚部で構成されていました。大学では作物栽培をやっていたので、標本や農具などを扱う標本部で資料整理を行いました。また、全国から古農機具資料の収集を行いました（注：その後、これらの収集物は、以下の2冊の写真目録として、東京農業大学図書館から発行されました。『古農機具類写真目録』第1集（1978年発行）、同第2集（1980年発行））。僕は古農機具を集めただけでは困るということで、標本部を「農業資料室」と名称変更をして博物館相当施設を作って、1981年に認可が下りたんですね。

学術情報課程を起ち上げる中心になられた吉村典夫先生は、1979年に科学技術館から東京農業大学総合研究所に移られておられましたので、1982年に学芸員課程が設置されると同時に移籍さ

れ、学芸員の養成に努められました。

吉村先生が教えられた、第1回の卒業生が、今、「食と農の博物館」の館長で学術情報課程主任の木村李花子教授ですね。その当時は、吉村先生は、全部の科目を教えられていました。うん、朝から晩の6時頃まで、さらに、夏休みに集中授業をやっていたので、大変だったと思います。

1984年に還暦前にお亡くなりになられたのも、ご無理がたたったのではと思います。



(梅室 英夫氏)

長塚：学術情報課程の立ち上げの時期に吉村先生が非常にご無理をされていたという、諸事情がよくわかりました。どうもありがとうございます。

惟村：その当時私は大学院の学生で、農芸化学専攻で、吉村先生と同じ分野だったんです。生物化学で、動物実験とかやっていました。

学術情報課程は大学院博士課程1年のときにできたばかりで、最初はまだ学芸員の資格を取るつもりはなかったんですけど、吉村先生が研究室に訪ねて来られたときに、大学院博士課程1年ということで、逆にそこで吉村先生に目つけられてしまいました。

当時のJICSTデータベースへの索引語の付与をやっ
てほしいと言われて、最初はもうとてもじゃないけど
実験が忙しいからお断りしたんですけど、何回も電話
があって、最新の論文が読め、自分の勉強にもなるか
らやりなさいと言われてですね。お断りできずに追い
込まれてやることになってしまいました。毎月、論文
が送付されて来て、索引語の付与をやることになりま
した。吉村先生から電話かかってくると、次は何をや
らされるんだろうと思い、冷や冷やしていました。そ
れが最初の出会いでした。



(惟村 直公氏)

学術情報課程が出来て2年ぐらい経過したときに、学術情報課程で学芸員の資格を取るよう
に言われました。その当時大学院生で学芸員の資格を聴講する制度はなかったのです。吉村先生に
話はつけてあるから、事務室に行って手続きをして来なさいと言われ事務室に行ったら、事務の
方に、今頃何を言ってんだって怒られてしまい、ひどい目に遭ったことがあります。

最終的には、昔の聴講生、今の学芸員資格科目等履修生、として学芸員の資格を取ることが出
来ました。その間に司書課程も開設されていました。当然、こちらの資格も取得するように言わ
れてしまいました。それで半ば強制的に履修させられてしまいました。

先ほど、梅室先生の話にもありましたが、授業は、吉村先生1人でやっておられたので、授業
を聞いてると、授業の内容が他の授業の内容とミックスしてくることがありました。結局、全部
の授業を受けてみないと全体のイメージがわからないところもありました。

もっと面白いのは、定期試験の当日に、答案用紙が違う科目が配られてしまったこともありま
した。梅室先生がたまたま試験監督をやられていたのですが、真っ青になり、全部答案を回収
されたことなどもありました。初めてのことで、吉村先生自体かなり大変だったのではと、今に
して思い出しています。

吉村先生から学術情報課程が発足したので、大学院修了後に教員として来ないと言われてい
ました。ですが、その年に、吉村先生がお亡くなりになられたのです。もうこの話はないと思っ
ていましたら、図書館に居られた葛城先生から非常によくしていただいて、学位がなくても来な
さいと行って貰え入職できました。実は、学位がないというのは、博士課程の修了前に、研究室から

出火して研究データがすべて消失してしまうことがあったためです。

大学院生の時に、吉村先生の研究室に行くと、パイプを咥えた紳士的な男性がいて、気さくに話しかけてくださいました。その当時、私は図書館学を全然知らなかったので、この方は一体どんな人だろうかと思ったことを思い出します。非常に優しく、いろいろとお話をしてくださいました。その脇に、眼鏡をかけてちょっと長髪の初老の男性がいて、お二人でよく話をしていました。それが、澤本先生と佐々木敏雄先生でした。

吉村研究室にちょこちょこ邪魔していましたが、どういう方々か知りませんでした。お酒の席に、一緒に参加させてもらったときに、澤本先生だと、後から聞いて分かったのです。その当時はもう怖いもの知らずで、佐々木敏雄先生とも気楽に話をさせて貰っていました。後から気がつく、非常に贅沢な、ご高名な先生方に囲まれて授業を受けたりしていたのだと思います。

当時、津田先生も学術情報課程に講義に来てくださっており、津田先生に教わりましたと言うと、村上先生もちょっとうらやましいですねとか言われて、皆さんに羨ましがられるんですね。講師の先生方は、すごく充実していたかなと思います。

その当時は、澤本先生や佐々木先生が日本農学図書館協議会の会長と副会長をされていることは分かりませんでした。その当時、佐々木先生と吉村先生とは非常に仲が良く、フランクにいろんな話をされていたのが印象に残っています。

吉村先生とは、同じ農芸化学科ということもあり関わりが深まり、わたしが日本農学図書館協議会や学術情報課程に関わるスタートになったように思います。

長塚：どうもありがとうございました。当時の事情を詳しく知ることが出来ました。それでは下田さん、よろしくお願いいたします。

下田：私は酪農学園大学の酪農微生物研究室を経て、一般企業の製品管理部門に就職しますが図書館の仕事がしたいと思い、薬科大学の図書館に職を得ることが出来ました。その後、酪農学園大学附属図書館に勤務、日本農学図書館協議会の存在を知りました。先ほど、1980年協議会の総会に出ていたよと言われました。まさに就職した年でおそらく何も分からずに参加したのだと思います。それから農学図書館員のための研修に関する情報を得ようになり、それまで医薬品情報管理や医学データベースしか知らなかったのですが、農学データベースに非常に興味を持つようになりました。

その後、東京農業大学に学術情報課程が設置されたことを知って、本当に羨ましく思っていました。同じような養成課程が出来ないか学内で働きかけもしましたが実現はしませんでした。

日本農学図書館協議会との関係は、私にとって北海道という東京から離れた場所から、中央で行われている動きを参考にすることで、1990年まで酪農学園大学の仕事に非常に役に立ち助けられました。



(下田 尊久氏)

長塚：どうもありがとうございました。それでは高山先生、よろしくお願いいたします。

高山：吉村先生、佐々木先生とは、私は直接的な出会いはほとんどないわけでございまして、何らかの用件があって、吉村先生や佐々木先生が澤本先生を訪ねて慶應義塾大学三田キャンパスに来られたときに、澤本先生と面会される前とか後とかに研究室で、ご挨拶を兼ねて、言葉を交わす程度であったと思っております。

記憶に残っておりますのは、吉村先生から「高山さんは図書館・情報学をやってるんですね。ずいぶん理論的なんですよ。私は学芸員で見世物屋ですから」と、二言目にはおっしゃいました。これは今にして思えば非常に意味のある、含蓄の深い言葉であったなというふうに思うんですね。図書館学にしる、図書館情報学にしる、あるいは司書、学芸員、博物館学にしる、これは、理屈だ

けでは済まないの、読む人があり、鑑賞する人がいて、初めて成り立つ図書館サービスであり、博物館サービスだということを教えてもらえる良い言葉であったと回顧しています。

見方を変えれば、大学院生として一つの人文社会科学の中に、図書館・情報学分野という学術分野を、日本の学術分野の中に打ち立てなければいけないということで、肩肘張っていた私だけじゃなくて、日本で最初に図書館学を大学院レベルで勉強するということで、みんなそれなりに肩肘張っていた大学院生に、一種の当て擦りであったのかもしれないと思ったりもします。

プロフェッショナルディシプリンはそういうものではない。単に理屈だけ筋が通ればよい、議論だけで済まないと言うことをおっしゃったということが、今も胸の奥深くにまで突き刺さる形で残されているみたいです。

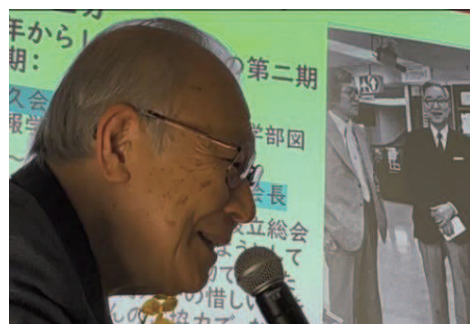
そういう機会を作ってくださった澤本先生との最初の出会いは、慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻の第一期生募集として1967年4月10日前後に実施されたと記憶する入試の第2外国語の面接試験会場でした。

日本ではそれまで図書館学を大学院はおろか、学部課程できちんとした形で教えるところは慶應の文学部以外にはなかったわけです。確かに図書館学としては、東京帝国大学の文学部の中で和田万吉さんが講義をした事実はあるんですね。しかし、文学部国文学専攻の1科目として講義をされたのであって、学部の専攻としては1951年度開設の慶應義塾大学文学部図書館学科が、大学院課程では、1967年度に始まった慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻が初めてです。そういう状況の中で、私も大変偶然の重なりがあり、図書館・情報学専攻を受験することになりました。ですから私は図書館・情報学というのがどういうものなのか充分にはわからず、入学試験を受けることになりましたし、図書館・情報学専攻が期待する



(高山 正也氏)

入学者としては、むしろ図書館学科の卒業生よりも他学部、他専攻の卒業生の入学を期待していたようでした。



(恩師の澤本先生の写真を前に)

入学試験も、専門科目と第1外国語、第2外国語でしたが、第2外国語は面接試験形式でした。面接では先生方の前に受験生が1人ずつ行き、ドイツ語かフランス語か、どちらかを選び、試験問題の用紙をその場で渡され、指定された一節を読み上げ、その意味を日本語で説明する。こういう試験でありました。

面接を受けましたときには、3人の先生方が並んでおられました。確か、記憶によりますと、真ん中に眼鏡をかけてパイプを燻らしている方が座っておられ、それが澤本先生にお会いした最初の瞬間であり、1967年4月10日であったと思います。

私は他学部からの受験でありましたが、面接が終わって受験生の控え室に戻りますと、文学部図書館学科のその年の3月卒業生と、前年3月に卒業して1年間受験準備をしていた人達がいて、先に面接を受けてきた人が、後から受ける人たちに情報を伝えていました。

面接官は今日の話の澤本先生、加えて中村初雄先生、藤川正信先生でした。その他に、当時の図書館学科には教授職としては渡辺茂男先生、主任教授の橋本孝先生がおられました。大学院を担当された教授職の先生は澤本先生、中村初雄先生、藤川正信先生でした。第2外国語の入試ではドイツ語は中村初雄先生が、多分、フランス語は藤川先生が担当されたと記憶しております。

控室の受験生の間で「教祖がいたよ」という言葉が飛び交いますから、一体これはどういう意味かと思っておりました。これは澤本先生のことなんだ、と判明したのは入学後の事でした。そして、これが絶妙なネーミングなんですね。

それからもう一つ、受験生たちの間で、「カポネはいないよ」と話していました。この「カポネ」というのは、橋本孝先生のことで、ロバート・L・ギトラーさんの後を受けて、2代目の図書館学科の主任教授です。

この方は慶應義塾の中では実力者でありまして、潮田江次塾長時代の学事顧問を務められ、図書館学科（ジャパンライブラリースクール）が開設されたときの文学部長でした。ご専門は倫理学、哲学で図書館情報学の専門家ではありませんでした。ですから、専門のことには口をお出しになりませんでしたが、学科の運営については責任を持つという立場を貫かれた人です。

「カポネ」の由来は、当時テレビで有名でありました「アンタッチャブル」という米国製のドラマに出てくるシカゴのギャングの親玉「カポネ」にある程度体型が、見る角度によってはそっくりで、図書館学科の内だけじゃなく、文学部あるいは三田の4学部の教員みんなが知っていたような、広く広まったニックネームでした。実にうまいニックネームと言えます。

図書館学科が始まってすぐの頃からこのあだ名がついていたようです。私の想像ですが、これらのあだ名をつけた人は藤川さんではないかと思っています。

そういうことがあって、入試段階で「教祖」としての澤本先生にお会いしたのが最初の出会いと言うことでございます。以降、澤本先生のご生涯にわたりご指導をいただきました。

長塚：皆さんから、大変興味深いお話を伺うことができました。登壇者のみなさまの日本農学図書館協議会と学術情報課程との最初の出会だけでなく、もう少し踏み込んだお話も出されました。

ここで、私自身の関わりについて、少しお話させていただきます。微生物の研究をしていましたが、1982年4月に紀伊國屋書店が提供していた米国のロッキード社が開発したオンライン情報検索システムに携わることになりました。日本農学図書館協議会の企画で、ライフサイエンスや生物農学系データベースの特徴と活用について紹介する機会がありました。そのとき、澤本先生、佐々木敏雄さんや吉村さんとお会いした最初でした。

その当時は、日本農学図書館協議会の事務所は渋谷駅の近くにあり、私の事務所と近かったので、夕方になると澤本先生から電話がかかってきて、喫茶店に呼び出されて、いろいろ話をすることがありました。その後、吉村先生から、電話があり、お酒は全然飲まれないのですが、料理屋に呼び出され、生物農学系の情報検索の本と一緒に出不来いのかとのお話しをお聞きしたことがありました。残念ながらすぐ体調を崩されて、実現できなかったことが思い出されます。

■学術情報課程の発足と吉村典夫先生

村上：皆さんのお話を大変興味深く聞いておりました。少し重複があるかもしれませんが、東京農業大学では学芸員課程が1982年に発足をし、翌年1983年に司書課程ができました。1984年には、途中で1回名称の変更がありましたが、司書課程と学芸員課程から成る学術情報課程に改組されました。東京農業大学という理系の大学で、図書館司書養成は全国的に珍しく、ほぼ東京農業大学だけと言ってもいいのではと思います。

学術情報課程の発足に当たって、非常にご尽力された方が吉村典夫先生で、日本農学図書館協議会の理事もされておられました。吉村先生は1984年にお亡くなりになっておりますので、今年は没後40年という節目になります。梅室先生に教えて頂きたいのですが、学術情報課程の名称にされた何かきっかけ、あるいは、どうしてその名称になったのかについて、何かご存じでしたら教えて頂けますか。

梅室：今まで学術情報課程っていう名前がどこにもなかったわけですね。それで、申請すれば認めて貰えるのではと考えたからだと思います。

村上：そうすると、文部省に学術情報課程の名称で申請すれば認めて貰えるのではと、吉村先生のアドバイスで決まったと言うことでしょうか。

梅室：その当時は文部省に誰か知り合いがいて、事前に意向も確認していたのではと思います。

村上：吉村先生は様々なネットワークを持っておられ、よく当時の先生方がおっしゃるのは吉村先

生は必殺仕掛人だと。もう口説かれたら断り切れない。

梅室：そういう性格をお持ちの方ということだと思いますよ。

村上：惟村先生は吉村先生の授業を直接受けられたのですが、吉村先生はアグレッシブにいろんな科目を教えられていたとのことですが、授業中は熱弁を振るわれた、あるいはほとんど学生を指名するとか、どのような授業をされていたのでしょうか。

惟村：吉村先生に目をつけられた学生の1人なんで、もう目を付けた学生には、とことん質問するんですよ。学芸員課程の科目では、座る席は自由なんですけど、暗黙の了解で誰がどこに座るかは決まっているんです。だからいつも私が座る席に別の学生が座っていると、他の学生が注意していました。私の席は定席のようなもので、吉村先生は私にばかり質問して来て、とことん質問攻めに合いました。吉村先生が「俺は手配師だ」と言われたのが印象に残っています。

村上：ここに吉村先生に関する没後に作られた追悼集がありますので、今日ご参加の皆さんに、閲覧をさせて頂きたいと思います。

■日本農学図書館協議会と佐々木敏雄先生

長塚：佐々木敏雄さんについて、今までお話いただいた以外のことで、何かありましたら、付け加えて頂ければと思います。

それでは、私からきっかけに、お話させて頂きます。オンライン情報検索に関わって、すぐに、生物・農学データベースのセミナーをやらせて頂いたとき、佐々木さんからいろいろな質問をされました。佐々木さんは、その当時、急速にオンラインデータベース検索や電子図書館などへの関心が高まってきた時代でしたので、特に海外でのいろいろな動向に強い関心を持たれて、人一倍、新しい動向を知ろうとされていたように感じました。

村上：吉村先生の亡くなられた後、佐々木敏雄先生が「吉村典夫先生を偲んで」に書かれているのですが、佐々木先生が天国に行ったら、「吉村先生に隣の席を空けていってくれ」という話を書かれていました。実際に、佐々木先生は吉村先生が亡くなられて、それほどしないで、お亡くなりになりました。吉村先生の奥様が、その話を聞き、「主人の隣には私が入りたいんだけど、入れるかしら」と書かれていたことを記憶しております。



(佐々木敏雄氏の写真を映しながら話し合う)

■日本農学図書館協議会 澤本孝久会長

村上：皆様に、日本農学図書館協議会と東京農業大学学術情報課程との最初の関わりについてお話ししていただきました。次は、1976年から1993年まで日本農学図書館協議会の会長をされた澤本先生についてのエピソードをご紹介いただければと思います。

梅室：一番記憶に残っているのは、パイプでの喫煙がお好きだったということですね。

惟村：澤本先生は、日本農学図書館協議会の会長で、実際に教壇に立って教えるという立場ではなかったかなと思うんですが、一番印象に残ったのは澤本先生が大学院の博士課程の2年か3年のときに、「科学の終焉」という特別講演をされて、感銘を受けました。その当時、農芸化学の分野

で研究を一生懸命やっていたので、「科学の終焉」とは一体何だ、ちょっとショッキングな内容だったんで、非常に覚えがあります。このままいくと終焉してしまうんだという、そのような話の中で紙での情報の伝達がどんどん衰退していくことなど、その当時大学院で学位を取ることにだけに集中してましたから、全く考えてもいなかった話がされて、こんな考え方もあるんだと印象に残っています。大学院だけの特別講義でやるのではなく、東京農業大学全体でこういう授業をすべきだと強く印象に残ったのが、事実です。

村上：澤本先生のご尽力で学術情報課程が創設されたときに、この『東京農業大学学術情報課程 40 年の歩み』にも掲載されていますが、当時の教員陣は先ほどお話にも出たように、当時の著名な方々にご担当していただくことになり、初期の学術情報課程の黄金期と言えると思います。

下田：日本農学図書館協議会事務局にお尋ねしたときに、澤本先生が多分、奥の方に在室しておられて、紹介して頂きました。北大農学部のエコロジの思い出など札幌時代のことをきっかけに親しくお話しさせていただきました。当時、自分が目指している図書館の方向性とか研究者の研究支援をどういうふうにしたらいのかなどお話をする中で、澤本先生のお言葉から自分は間違っていないと言う確信を得て、勇気付けられて帰ってきたと記憶しております。

村上：はい、ありがとうございます。先ほど高山先生から、澤本先生は「教祖」と呼ばれていたとのお話を頂きましたが、高山先生、その他にも澤本先生のエピソード等がおありでしたら、いかがでしょうか？

高山：先ほど澤本先生が「教祖」と呼ばれていたと申しました。これの意味なんですけれども、何で、藤川さんが「教祖」と付けたかという、ロバート・ギトラーさん、この方はジャパンライブラリースクール（慶應義塾大学図書館学科）の初代の学科長（主任教授）であります。澤本先生はギトラーさんの専属通訳でもあり、秘書役をされたわけです。それをギトラーさんが日本におられた 5 年間ずっと続けられた。ギトラーさんも澤本先生を大変に信頼しておられた。その結果と言うか、図書館はどうあるべきかと言う話題になると、澤本先生がギトラー先生の言葉を日本語に翻訳して、図書館情報学の真理として、あたかも宗教団体の教祖が宣旨を下す如くに話される。そこから出たネーミングだと思います。

澤本先生はギトラーさんの考え方、あるいはギトラーさんを通じてアメリカ型の図書館学を日本で一番理解しているとの自負があったと、私は思っています。

これが実は、澤本先生を難しい立場に追い込むことになりました。すなわち、澤本先生の口を通じて語られるギトラー先生の説かれるアメリカ型の図書館理念が、日本の「誇りだけは高い(?)」図書館の現場の大長老たちの頭にカチンときたと、いうことなんです。すなわち、新しい米国流の図書館の在り方を推奨する慶應義塾大学文学部図書館学科（ジャパンライブラリースクール）の代表としての澤本先生と、日本の公共図書館を中心とするところの図書館の現場の長老との間の深い溝になったというふうに私は理解しております。

そのことが、例えば、先程来問題になりました、東京農業大学学術情報課程が司書課程と云わない理由になっていると思っています。これ、文部省が本当に図書館法に基づいて、法解釈に順応しながら、行政手続きをやるなら、司書課程でなければ認めないはず。東京農業大学で学術情報課程の名称とするのであれば、文部省としては、司書資格を認定しないと言っても一向に構わない。だけど、先ほど、文部省に誰か知り合いがいて、その知り合いを通じて、承認して貰ったのでしょとの情報が出たかと思いますが、そのどこかに澤本先生の意向が働いたのではないかと、私は推測します。

もう一つは、学術情報という語を使っている。この名称は、1980 年代の初めに、当時の文部省の中で学術情報という言葉が、どういう意味を持っていたかということに関係します。

少し視点を変えます。日本の図書館が占領軍によって、国立の中央図書館が帝国図書館から国立国会図書館になりました。

一応、形の上では国立図書館を経て、国立国会図書館が設立されました。国立国会図書館は、これは単なる国立図書館ではなくて、行政政府にあった帝国図書館を立法府に移行したことになって

います。今日、元国立国会図書館の方もご出席されておられますが、国立国会図書館の皆さん方に行政的なことをお願いすると、「いやそれは国立国会図書館ではちょっと」となります。日本の職員、公務員としての身分をわきまえられた立派なお答えだと思うのですが、実際問題として、日本の社会にとっては非常に困ったことになるのです。行政的に国立国会図書館が動いてほしい場合もあるわけです。それを、お願いするところがないのです。

「立法府にある国立国会図書館ではできない」と言われるなら、国立国会図書館は別に行政府に国立図書館を創って、現行の国立国会図書館は立法府所属の国立の議会図書館に徹すればよいのです。

それに類することでは、1980年代に、文部行政の中で大きな話題がありました。即ち、学術情報センターを創設することがありました。1976年に東京大学情報図書館学研究センターが発足し、それをベースにして1986年に猪瀬博先生なんかを中心になって学術情報センターができて、現在の国立情報学研究所に発展していくわけで、この流れの発端がありました。

東京農業大学の学術情報課程が出来たのは、学術情報センターが始まる直前の段階ですから、図書館情報学関係のことでやるんだったら司書課程ではなく学術情報課程という言葉を使えばいいと考えられたのではと思います。先ほど言いましたように、ジャパンライブラリースクール（慶應義塾大学図書館学科）と日本の公共図書館との間に大きな溝ができていて、公共図書館と一緒にの水準では絶対にダメだという思いがあるわけですね。課程の名称ぐらい変えようと、それで、学術情報が使われたのではないかなと解釈しております。

村上：はい、ありがとうございます。確かに、学術情報センターは、1986年4年に発足しています。あの頃に大学図書館ではなく学術情報センターということで、学術情報の言葉が広く使われ出した頃ですね。

長塚：ありがとうございます。澤本先生のことについて、皆さまから、いろいろなお話が聞けて大変よかったなと思います。

ここで、学術情報課程と日本農学図書館協議会の両方に関わった方ということで、東京農業大学図書館に非常に関わりが深い葛城昭さんについて、コメントを頂ければと思います。

梅室：葛城昭さんは、最初は教職員組合委員長をされていました。

今でも教職課程を取ってる学生さんが、700人ぐらいいます。学術情報課程で司書教諭の資格が取れるようになると良いのではと考えております。

長塚：どうもありがとうございました。

下田：葛城先生には、頻繁にお会い出来たわけではないですが、酪農学園大学は農業の現場に近い学生を養成する大学で当時、研究者に対するサポートがあまりないなかで（研究支援の）図書館サービスのお話を聞かせて頂いたと記憶しています。いつも優しく、心配をして下さり、自分の大学ではなかなか理解してもらえない、相談相手もいない中で、相談に乗って頂けたことが本当に心強かったです。エクステンション（改良普及事業）や農業技術研究の普及に関心があったので、そんなことを話しました。



（葛城昭氏：会長 1994～2003）

仕事を辞めて、イギリスに留学して帰ってきたときに、お電話をいただき、海外の国際機関の図書館の求人情報を頂きました。ただ、帰国直後で、残念ながら挑戦する勇気がありませんでした。葛城先生のそうしたお働きをすごく鮮明に覚えています。最終的には藤女子大学図書館に就職が決まりましたが、農学分野と離れ難くどこかで繋がっていたいという思いがあり、個人会員として繋がっております。

長塚：どうもありがとうございました。大変いろんな角度からのお話をお聞きでき、1980年代、澤本先生が会長された時代のことが、少し明らかになってきたのではと思います。この時代のいろいろなご苦労も含めて、今後どういうふうに進展させていくかということでは、梅室さんからの

具体的なご提案など、今後考えていく材料が出てきたのではと思っております。

時間が押してきましたので、ここで今日ご参加いただいている方から、ぜひこんなことがと言うことがありましたら、お話頂ければありがたいと思います。

■座談会参加者から

黒澤弥悦先生：学生時代に東京農業大学の学科の先生以外では、図書館の葛城先生に大変お世話になりました。私は農大に入学して、1年生で研究室に入室させて頂きました。最初に4年生の卒業論文の調査を手伝ったときに図書館を訪ね、葛城先生が優しく、いろいろと教えて下さり、また書庫にもついて来て頂き、一緒に文献を探してくれた記憶があります。いつも笑顔で、優しくてお世話になったという記憶があります。もうお一方は図書館の閲覧室に居られた甲斐先生で、図書館を訪ねる度に、葛城先生と甲斐先生のお二人の先生に大変可愛がって頂きました。

葛城先生が現在の学術情報課程に、今日の座談会でご紹介あったように関係していることを、初めて知りました。

(黒澤弥悦先生)

実は、今年の3月31日で、私は農大を離れてしましますが、今想えば、葛城先生には農大に入学して図書館は最初の歓迎を受けた場でもあったように思います。今日も葛城先生のお話を伺い、農大を終わるとは何かご縁があるのかなと思っております。

最後に、学術情報課程で、学芸員と司書の2つの資格が同時に取得出来るのは、すごいことだと思っています。15年間、学生の指導・就職を担当して、毎年のように地方公務員などの就職で、まず面接時に教育長とか、教育委員会の課長さんから、「東京農業大学でよく2つの資格を取得し、頑張りましたね」と尋ねられ、面接ではその話だけで終わり、採用されることもあったようです。卒業生から市役所に採用されて、「図書館か、博物館に配属されるかと思っていたけれども、市民課とか税務課に配属になりました」と聞かされることもあります。そのような時には、「5年後位には、図書館や博物館に異動になると思うので、それまで頑張ってください」と言っていました。長塚：どうもありがとうございました。他の方で、もうお一方ぐらいいは大丈夫だと思います。原田さんいかがでしょうか。

原田智子先生：鶴見大学で長塚先生とご一緒だった原田と申します。私は高山先生の後輩にあたりますが、慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻に入学したとき、澤本孝久先生は主任教授をされていました。「教祖」というあだ名で、学生からは結構恐れられていました。非常にきめ細やかな先生で、私は学部では図書館・情報学を専攻していませんでしたので、澤本先生から、学部の3年生、4年生の講義を受けなさいと、非常に細かく、こういう科目をこうやって順に取っていきなさいと教えていただきました。大学院1年生の授業は2コマしか取らせて頂けませんでした。大学院1年生で取る概論の授業を澤本先生が担当され、受講者は三、四人でした。印象に残っている授業中のエピソードとしては、農学ご出身の澤本先生が、桜の花はピンクだけだと思っていたら間違いだよとおっしゃったことです。先ほど、惟村先生もいろんな角度からの視野を持つことができるとお話しされましたが、緑色の桜もあるということをおっしゃったことが、未だに記憶に残っています。何事も決めつけてはいけないということを教えていただきました。

(原田智子先生)

澤本先生とは大学からの帰りの電車が同じ方向でしたが、ある時渋谷駅で電車に乗ると、たま先生と奥様が座られており、楽しくお話をしながら帰ったのを覚えています。また、澤本先生の喜寿のお祝いパーティーを東京農業大学で開催されたときに、参加させていただきましたこともよい思い出です。私の図書館・情報学のスタート時点で大事な教えをいただき、今日の私があるのは先生のお蔭と深く感謝しております。

那須雅熙先生：日本農学図書館協議会と東京農業大学の歴史については、東京農業大学に勤務する前には、私自身、あんまり知らなかったんですね。国立国会図書館にいる頃に、図書館学資料室があり、図書館関係の雑誌の中で、非常に注目してたのが、日本農学図書館協議会、医学図書館協会、薬学図書館の三つの会誌です。どうして、私が見てたかと言いますと、この三つの会誌は新しい動きに関心を持って記事を掲載していました。非常に先鋭的な活動なさっているんで、新しいことを知ることができると言う気持ちがその当時からありました。

先ほどから、学術情報課程の命名の話が話題になりました。どなたが命名したのかはよく分かりませんが、先見の明があります。

司書課程が、先ほど黒澤先生もおっしゃったように、学芸員課程と一緒にしている。一緒にしていることでの新しさがある。それから、情報に関しては、ジャパンサーチなどを見てもわかりのように、もはや情報に関して、境界はないんだという印象を皆さんのお話を伺いながら感じた次第です。



(那須雅熙先生)

長塚：まとめの言葉まで、おっしゃって頂いて大変ありがとうございます。高山先生はもう少しお話しされたいということですが、予定していたお時間になりましたので、まだ十分カバーできなかった話題も多いんですが、座談会はこれで終了にさせて頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

日本農学図書館協議会の歩み

Milestones of the Japan Association of Agricultural Librarians and Information Specialists

長塚 隆*

日本農学図書館協議会(以下協議会)は、1966年に設立され、今年(2024年)で創立58年目を迎えます。創立以来、任意団体として、多くの関係するみなさまのご協力やご支援を頂き農学系図書館事業の振興および農学情報の普及に取り組んで参りました。

2004年3月には特定非営利活動法人として認定され、セミナーの開催、見学会の実施、会誌の発行など会員間の交流と農学・農業情報の重要性を周知する活動を継続し、現在に至っております。

昨年(2023年)度も協議会の会誌を会員や図書館に關係するみなさまにご執筆頂き、年4回210号〜213号まで刊行することが出来ました。

また、2024年3月には第130回農学図書館情報セミナー「大学図書館をめぐる最新動向を探る」をオンラインで開催し、多くの方にご参加頂きました。

3月18日には本号にその記録が掲載されている座談会「日本農学図書館協議会の歩みを振り返って〜1980年代を中心に、東京農業大学学術情報課程との関わり」を東京農業大学学術情報課程のご協力で開催いたしました。

本稿では、座談会で明らかになった協議会に関わられた先人の考えや思いの一端を紹介し、協議会の歩みを振り返ることで、今後の協議会のあり方を考える一助にできればと考えております。もちろん、本稿の内容は協議会としての公式見解ではなく、筆者の見解であることをお断りしておきます。

1. 日本農学図書館協議会の活動時期の区分

1966年に設立された協議会の活動は大きく次の4つの時期に区分できます。

1) 第一期(創設期：1966年〜1975年)

1966年〜1971年までの当初5年間は東京大学農学部図書館長の古島敏雄氏が初代会長を務められました。その後、1972年〜1975年までは農林金融公庫の広野正一氏が第2代会長でした。

2) 第二期(展開期：1976年〜1993年)

第一期の9年間に比べ、第二期は17年間と長期となっています。この期は、慶応義塾大学文学部図書館・情報学科教授をされていた澤本孝久氏が第3代会長を務められました。

澤本氏が会長をされた17年間の間には、副会長は3名の方が交代されました。1976年〜1980年は名古屋穀物取引所の小野稔氏、1981年〜1987年は東京大学農学部図書館から図書館情報大学教員に移られた佐々木敏雄氏、1988年〜1993年は東京農業大学図書館の葛城昭氏がそれぞれ担当されました。

3) 第三期(継続期：1994年〜2003年)

東京農業大学図書館の葛城昭氏が会長を務められ、筆者が副会長でした。

4) 第四期(法人化以降：2004年〜)

葛城昭氏が会長をされていた最後の時期にNPO法人申請の準備が進められ、NPO法人化とほぼ同時期に筆者が会長に選任されました。副会長は東京大学農学部図書館の増田元氏が務められました。その後、2008年から2022年まで東京農業大学学術情報課程の惟村直公氏が務められました。

* 鶴見大学名誉教授 〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-3

* Takashi NAGATSUKA, Tsurumi 2-1-3, Tsurumi-ku, Yokohama, Japan 230-8501 nagatsuka-t@tsurumi-u.ac.jp

表1に、「日本農学図書館協議会の沿革」を示していますので、以下の説明は表1を参照しながらお読みください。

2. 第一期(創設期：1966年～1975年)

1966年に創設された協議会は、古島会長、広野副会長の元に、評議員10名、理事6名と監事2名で構成されていました。創設時から、第二期で会長・副会長として中心になられる澤本、佐々木の両氏は理事として参画されていました。

当初から理事として参画され、その後、東京農業大学学術情報課程の教授をされた伊藤全氏が、『日本農学図書館協議会設立までのよもやま話』(会誌No. 134, 1-9, 2004)で、協議会設立

までの経緯について次のように述べられています。一部()内に筆者による補足を加えています。

1945(昭和20)年4月に農学部(東京大学)に入った(中略)協議会発足の根回しをした3人(会報NO. 46, 2)佐々木・石原、私は(中略)石原氏と私は(中略)獣医学科であった。

佐々木(第Ⅱ期副会長)さんは林学科猪熊先生(後に：国立国会図書館専門調査員)の教室で、(中略)

1962年4月から3か月、慶応義塾大学文学部図書館学科で生物科学図書館現職者短期特別研修(六月三十一日づけ修了証)を(中略)図書室の仕事は前の年の後半からしかやっていない

表1 日本農学図書館協議会の沿革

年	主な出来事
1966	日本農学図書館協議会発足 会長：古島敏雄（東京大学農学部図書館長） 副会長：広野正一（農林省農林水産技術会議事務局研究参事官）
1969	『農学図書館入門』刊行 ※国際農学図書館協会（IAALD）発行『Primer for Agricultural Libraries』の翻訳書
1970	『日本農学文献記事索引』（協議会編：農林省委託事業）創刊 『環境公害文献集』（日本科学技術センター委託事業）作成協力開始 『欧文記事索引』（科学技術庁委託事業）作成協力開始
1972	会長：広野正一（農林金融公庫） 副会長：澤本孝久（慶應義塾大学文学部図書館・情報学科教授）
1973	AGRIS InputSheet 作成協力開始
1976	会長：澤本孝久（慶應義塾大学文学部図書館・情報学科教授） 副会長：小野稔（名古屋穀物取引所）
1978	国際農学図書館協議会（IAALD）入会
1979	『米国における農業・農学図書館の歴史』（訳）（JAALD シリーズ：no. 1）
1981	会長：澤本孝久（慶應義塾大学文学部図書館・情報学科元教授） 副会長：佐々木敏雄（東京大学農学部図書館）
1982	『農学図書館の国際的諸問題』（訳）（JAALD シリーズ：no. 2）
1983	『農学図書館入門：日本語版』
1984	『CAB と CAIN (AGRICOLA) の評価：二つの農学データベースのカレント・アウェアネス・サービス達成能力の比較研究』（JAALD シリーズ：no. 3）
1986	『農学関連データベースの比較研究論文集』（JAALD シリーズ：no. 4）
1987	『図書館員のためのバイオテクノロジー講演集』
1988	会長：澤本孝久（慶應義塾大学文学部図書館・情報学科元教授） 副会長：葛城昭（東京農業大学図書館）
1989	『日本の農学関係書誌の書誌』
1994	会長：葛城昭（東京農業大学図書館） 副会長：長塚隆（紀伊国屋書店電子情報部）
1996	創立 30 周年記念特集（会誌 102 号）
2004	3 月：特定非営利活動法人（NPO 法人）認定 会長：長塚隆（鶴見大学文学部教授） 副会長：増田元（東京大学大学院農学生命科学研究科）
2008	国際農学図書館協議会（IAALD）世界大会を東京農業大学厚木キャンパスを会場に開催 会長：長塚隆（鶴見大学文学部教授） 副会長：惟村直公（東京農業大学学術情報課程准教授）
2012	葛城昭名誉会長のご逝去を悼む（会誌 165 号）
2018	半世紀を超えた日本農学図書館協議会—創立 50 周年を契機として（会長 長塚 隆）（会誌 190 号）
2020 ～ 2022	コロナパンデミック関連記事を会誌に継続掲載
2021	会誌 200 号記念寄稿（私と会誌：これまでを振り返って）
2024	第 130 回農学図書館情報セミナー（大学図書館をめぐる最新動向を探る）

私でも受講することができるかどうかお伺いをたてに아가って、澤本(第Ⅱ期会長)さんにつかまってしまった。

伊藤氏のお話に出てくる佐々木、石原の両氏は協議会設立時の理事として、伊藤氏と共に協議会の創立とその後の活動の中心を担って活躍されました。慶応義塾大学で開催された「生物科学図書館現職者短期特別研修」は、大学や農林省研究所の図書・情報部門の活動に大きな力となったばかりでなく、その後、協議会の活動を担うことになる人たちの研鑽の場としての役割も大きかったようです。

協議会創設時の会長であった古島敏雄氏は『発会に当たって』(会誌No. 1, 1, 1966)の中で、協議会の創立の目的について、次のように、述べられています。

研究者にとって図書資料は不可欠な研究資料のひとつであり、常時、思うままに利用しうる状態にあることが望ましい。戦前から研究生活を続けてきたものにとっては、このような状態を実現する最良の方法はそれを所有することであった。(中略)本協議会の創立を導いたものは、本来このような研究者の必要を感じたところから出てきたものと考えて良い。

図書館の整備、図書館間の相互連絡については、過去に十分な伝統を持たないわが国にあっては、図書館利用者である研究者の、自発的な要望としては、図書館間の相互連絡に対しては具体的な提案は出てきにくい。(中略)当協議会の創立に至る経緯にも、図書館人の発議がより強い力を持っていたとみてよいであろう。(中略)今日公的機関における図書館の地位のなお低く、不安定な現状においては、個別機関の活動自体に多くの困難を持っている。

この当時、図書館の地位が低く、個々の図書館の活動に多くの困難を抱えていることを指摘された上で、研究者にとって図書資料は不可欠な研究資料のひとつであり、常時、思うままに利用しうる状態にあることが望ましい。そのことを実現して行くために、図書館間の相互連携

の進展が大切であり、このような点からも協議会が求められているのではないかと述べられています。

図書館間の相互連携を促進していくことは、創立以来の協議会としての大切な指針となってきました。現在は、研究資料のデジタル化が進展して、創立時の状況とは大きく異なる環境となりましたが、研究者にとって研究資料が「常時、思うままに利用しうる状態」を目指していく点では変わっていないように感じます。

この第一期には、協議会として1969年に国際農学図書館協会(IAALD)発行の『Primer for Agricultural Libraries』の翻訳書『農学図書館入門』を刊行し、海外の農学図書館の状況を紹介しています。

1970年には農林省委託事業『日本農学文献記事索引』、日本科学技術センター委託事業『環境公害文献集』、科学技術庁委託事業『欧文記事索引』などの作成に協力しています。さらに、1973年にはAGRIS Input Sheet作成協力を開始しています。このように、協議会として、農学関係の研究情報を収録した索引誌などの作成協力事業が拡大していきました。

3. 第二期(展開期：1976年～1993年)

座談会の記事でも詳しく触れられていますが、研究情報の抄録誌や索引誌などのデータベース化が進展し、オンラインでの情報検索が普及し、研究者の情報探索の手法が大きく変化した時期でした。図書館は変化への対応を迫られていた時代で、多くの図書館で学術情報センターやメディアセンターへの名称変更がなされました。

この時期には、研究情報の抄録誌や索引誌などのデータベース化が進展し、オンラインでの情報検索が普及していく中、1980年に図書館員に向けて農学図書館セミナーが開始されました。

また、海外の農学図書館の取り組みの紹介に力を入れ、JAALDシリーズとして刊行事業を行っています。

1979年に協議会訳で『米国における農業・農学図書館の歴史』、1982年に『農学図書館の国際的諸問題』、さらに、1984年にSusan Harvey

著『CABとCAIN(AGRICOLA)の評価：二つの農学データベースのカレント・アウェアネス・サービス達成能力の比較研究』を岡沢和世訳で、1986年には『農学関連データベースの比較研究論文集』を協議会訳で刊行しています。

これらの4冊は海外資料の翻訳でしたが、1987年に初めて協議会セミナーの講演録がJAALDシリーズ『図書館員のためのバイオテクノロジー講演集』として発行されました。

この他に、1983年にはOlga Lendvay 著『農学図書館入門：日本語版』が協議会の翻訳・編集で発行されました。

海外の農学図書館活動を積極的に紹介する取り組みは、農学図書館の国際的な団体である国際農学図書館協議会(IAALD)に1978年に加盟したことで促進されたと推察されます(表1)。

澤本会長は1992年の総会挨拶のなかで、「協議会の設立総会を開いてから、(中略)26年が過ぎようとしています。(中略)また、会の重要人物であった佐々木さんをはじめ、何人かの惜しい人をなくしましたが、皆さんのご協力で、なんとか今日までやってることができました。」と、多くの会員の協力があって協議会が運営できたと感謝されています。

4. 第三期(継続期：1994年～2003年)

日本経済の停滞が始まった時期でしたが、一方では1995年に米国でインターネットが公開され、Webが普及し、図書館ホームページが開設されるなど、社会のデジタル化が進展した時期でもありました。社会のデジタル化の進展により、図書館を巡る環境が大きく変化しました。

図書館では、電子図書館やデジタル図書館への多くのプロジェクトが試みられました。

1996年、当時の葛城会長は協議会の創立30周年に当たり「顧みるとこの30年間は束の間のようにあったが、また色々なことがあったという感慨も一入である」と述べられています。

農学図書館セミナー(現農学図書館情報セミナー)は、本年度で130回となりました。

1980年7月に第1回が『情報とは何か』井上如氏、『農学における情報とは何か』佐々木敏生氏のお二人の講師で始まり、40年以上にわたり継続してきました。農学図書館情報セミナーは、

その時々図書館員にとって大切なテーマで開催され、専門的な人材の養成に少なからず貢献出来ているのではと自負しています。

この当時の会誌の記事から、時代の動きがうかがえます。1996年の101号では『CD-ROMネットワークの現状と今後の動向』と題して荒井幹夫氏が執筆されています。これ以降は急速にデジタル化・ネットワーク化に関連する記事が多くなっています。

例えば、1997年の105号では真銅解子氏による『電子図書館時代のサーチャーの役割』、Hugo Besemer 他 神谷淑子訳『インターネット上の情報 そこに何があって如何にして見つければ良いか』や槇山進一氏による『インターネット・モデルロジー』などデジタル化の進展やインターネットの普及を背景にした関連記事が多く掲載されています。

それ以降情報のデジタル化はさらに加速し、1997年の107号では森脇直基氏の『農業関係研究情報業務の高度化に向けて』や筆者の『バイオ・農学図書館員のためのWeb入門(第1回)』などが掲載されています。続く1998年の108号では高山正也氏の『米国の最新図書館事情とデジタル・ライブラリー・プロジェクトの概要』や筆者の『バイオ・農学図書館員のためのWeb入門(第2回)』などが掲載されています。

デジタル化の進展への影響について、1998年の109号では、佐藤義則氏が『オンラインジャーナルの光と影』と題して情報技術の進展への多面的な視点を持つことの重要性を指摘していますし、桧垣宮都氏が『農学部再編と図書館』と学部の再編との関係で図書館について検討されており、現在にも継続する課題が取り上げられています。

1998年の110号では、壽憲子氏が『農林水産研究情報センターからのWWWによる情報提供について』として、Webによる情報発信について紹介されています。会誌の掲載記事から、急速な情報技術の進展に対応する図書館の情報提供のあり方が熱心に探求されている様子が伺えます。現在の生成AIの急速な普及の時代にも共通するところが多くあるように感じられます。

5. 第四期(法人化以降：2004年～)

21世紀になるとインターネットの普及がさらに促進され、Googleなどの検索エンジンの利用も一般的になり、学術雑誌のオンラインジャーナル化が大きく進展するなど図書館を取り巻く環境は大きく変化しました。

協議会の活動もそのような変化に対応すべく、会員の支援により2004年にNPO法人化を行いました。

2008年には、協議会として永年の念願であった国際農学情報専門家協会(IAALD)世界大会を海外から多くの図書館員や情報専門家のかたを迎えて8月24日-27日の会期で、東京農業大学厚木キャンパスにて開催できました。

2018年には、協議会創立50周年を迎えました。2020年には会誌が200号に到達し、201号で、元事務局長の木村博、当時の事務局長田沼繁の両氏から記念寄稿が寄せられました。

現在は、多様な生成AIの普及など情報技術の急速な進展の中にはありますが、1966年に初代会長古島氏が言われた研究者にとって研究資料が「常時、思うままに利用しうる状態」の実現には、まだ、道半ばと言えます。

もう一度、初心に立ち戻り、協議会の会員のみなさまと共同して、図書館としての時代に即応した新たな役割を探求していくことが大切であると感じています。この遠大な目標に向かって行けたらと考えています。

『東京農業大学学術情報課程1982年～2022年における40年の歩み』： 教材としての顔

"Forty years of Scientific Information Course 1982-2022 at the Tokyo University of
Agriculture" : Role as a Teaching Material

村上 篤太郎*



書誌

タイトル	東京農業大学学術情報課程1982年～ 2022年における40年の歩み
著者・編者	東京情報大学学術情報課程 編集
出版事項	東京：東京農業大学学術情報課程(出版)
出版年月日	2023.3
数量	119p
大きさ	26cm

1. はじめに

東京農業大学学術情報課程(以下、学情課程)は、1982年に開設された学芸員課程を母体とする組織であり、2022年度で40年を迎えた。本書、『東京農業大学学術情報課程1982年～2022年における40年の歩み』(以下、『40年の歩み』)は、その40年を記念して製作されたものである。この製作の切っ掛けは、学情課程に38年間勤務し、2022年度末で定年退職された惟村直公先生の大存在が大きい。惟村先生が学情課程の大黒柱であったため、これからの教員が惟村先生に頼る

ことができなくなることから、先生の持つ暗黙知を少しでも形式知に変換し、記録として残す必要があった。開設から40年という節目が重なり、事が動き出し、2021年度から、筆者が『40年の歩み』の編集責任者を拝命し、企画が始まった。この40年という節目がなければ、どうなっていたのかと思うと、多くのご縁を感じざるを得ない。

2. 『40年の歩み』の編集

『40年の歩み』を製作するには予算が必要で

*東京農業大学教職・学術情報課程 〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
Tokutaro MURAKAMI, Scientific Information Course, Tokyo University of Agriculture. 1-1-1 Sakuragaoka, Setagaya-ku, Tokyo, 156-8502, Japan

あり、幸いにも学情課程の2022年度予算として製作費を申請額通りに獲得できた。しかし、単なる形式的な資料ではなく、履修学生への教材としての役割も果たすようにとの要請があった。そこで、同僚の教員とも確認し、元教員数名に原稿を依頼した。最終的に元教員8名、現教員6名(学情課程のほか、前学情課程主任、元学情課程主任を含む)、合計14名に加え、江口学長や入江学情課程主任からも原稿をいただいた。また、卒業生の選定については、元学情課程の黒澤先生と、北海道オホーツクキャンパスの宇仁先生の協力を得て、15名の卒業生に原稿依頼を行った。『40年の歩み』はWebサイトでの公開を想定し、各著者から事前にホームページ掲載の承諾を得た。

2022年夏頃から原稿が順次届き、教員からは授業や実習への取り組み、卒業生からは当時の授業対応や資格を活かしたエピソードなど、現役学生に対する貴重な体験談が集まった。原稿が集まると、筆者が進捗管理を行い、同僚教員の協力を得て、校正作業を繰り返し進めた。

他方で、『40年の歩み』におけるもう一つの柱としての資料編を充実させる必要があった。そして、このことが役に立つ教材としての位置づけが得られるからである。教務課においては資格取得者数のデータを参照、毎年度発行されている東京農業大学の『履修の手引き』のバックナンバーの閲覧、校友会事務局においては『農大大学報』のバックナンバーから情報を調べさせていただいた。人事課からは元教員の人事データを、企画広報室、大学史史料室からは写真データの提供をしていただいた。学情課程の同僚教員からは各種データの協力を得て、根気よく作成していった。その結果、次のような資料編をまとめあげることができた。

- ・学情課程の年表
- ・歴代課程主任一覧と歴代専任教員一覧
- ・キャンパス別資格別年度別科目担当教員一覧
- ・資格取得のための履修科目一覧・履修費用
- ・年度別学部別学芸員・司書資格取得者数
- ・学芸員・司書関連就職先一覧
- ・『学術情報課程通信:農大と図書館・博物館・動植物園を結ぶネットワーク』のバックナ

ンバー表紙一覧

- ・『東京農業大学オホーツクキャンパス学術情報課程年報:博物館と学芸員を目指す』のバックナンバー表紙一覧

- ・「食と農」の博物館における学情課程が主催・共催・協力等をした企画展ポスター一覧

ただし、資料編を通して唯一残念だったことは、学情課程の発足当時の資料は皆無であった。当時の学情課程は、独自の事務室が存在し、事務職員が時間割、履修業務等を担当していたが、人事異動や事務組織の改編に伴い、貴重な情報資源が失われたのではないかと推測される。そのため、1982年度から1999年度にかけて開講された科目の名称と担当者名が判明していない。履修卒業生が個人的に保有されている関連資料があれば、失われた時代の歴史を紐解けるかもしれないが、その余力はなかった。それ以外の情報は、無事にまとめあげ、2023年1月下旬に『40年の歩み』の原稿が完成し、印刷・製本作業を経て、年度内に納品できた。

3. 『40年の歩み』の納品後

完成した『40年の歩み』であるが、前述したように、教材として位置づけられ、2022年度の第4学年履修学生には卒業式当日に、2023年度の第2学年から第4学年の履修学生全員には、必修授業で配布した。そのほか、執筆者や学内各部署をはじめ、実習を受け入れていただいている学外連携機関などにも寄贈した。

国立国会図書館にも納本し、機械可読目録であるJAPAN/MARCができており、「国立国会図書館サーチ」で検索できるようになっている¹⁾。さらには、学情課程のWebサイトでは、PDF形式で全ページを閲覧できる²⁾。

4. 紙媒体の『40年の歩み』

紙媒体の『40年の歩み』は、サイズは26cm、本文は全119ページのカラー仕上げの非売品である。ISBNは付与していない。表紙は光沢があり、カラーで印刷した際の発色が良いアートポストを使用している。紙の厚さを適度に有している。表紙と裏表紙には、背表紙を中央に包むイメージで、表の一部を拡大した写真(鈴木迅氏撮影)を使用している。裏を「編む」と、

タイトルの末尾の「歩み」とが、語呂合わせを感じさせたりする。本文もカラー印刷に適したコート紙を使用し、約40点の写真も掲載している。視覚的にも訴える内容となっており、洗練された上品さを感じさせる。

なお、現時点で判明している誤字・脱字については以下の通りである。

・ p.22 右列 5行目 佐々木敏夫 ➡ 佐々木敏雄

・ p.83 佐々木敏夫 ➡ 佐々木敏雄

・ p.80 追記

2008(平成20)年 国際農学情報専門家協会、アジア農業情報技術連盟会議の合同国際会議を共催。主催は日本農学図書館協議会、農業情報学会。(厚木キャンパス)約300名参加。

5. 日本農学図書館協議会の座談会から

2024年3月に東京農業大学で開催された座談会から、学情課程にとって大きな収穫が得られた。それは、現在の学情課程の名称の由来が、文部省の学術情報センターの構想にあったということが推測できたからであった。

学情課程は、1982年4月に学芸員課程として開設され、1983年4月に司書資格取得履修の認可を得て、1984年4月に「学術情報課程」と改称した。その経緯は、吉村典夫先生が文部省(当時)との人脈を通じて、1986年4月の発足に向けて大きな話題となっていた学術情報センター構想の情報を得られたことがきっかけであった。当時、「学術情報課程」という名称は他大学で存在していなかったため、文部省としては、学術情報センター発足に向けて、「学術情報」という表現が普及・定着することを期待していたと思われる。そして東京農業大学としては、この名称で申請をすることで認可が得られるという思惑があった。

こうして改称された学情課程は、その後、様々な試練を乗り越え、先人の方々のご尽力によって基盤が固められ、40年間にわたり、自然科学をバックグラウンドとする学芸員と司書を輩出し続けている。

6. おわりに

『40年の歩み』は、多くの方々の協力の賜物であり、改めて感謝を申し上げたい。筆者にとって、『40年の歩み』に携わったことは、多くのご縁を感じながらも、これまで連絡を取ったことがなかった先生方、卒業生、事務の方々、印刷会社の方々など、多くの方々との交流を通じて、いわゆる「農大ファミリー」を体験できた充実した時間であった。編集過程を通じて、記録を残すことの重要性和、それを次世代に継承することの重要性を改めて実感した。難産の末に完成させることができたことは望外の喜びであり、今後も学情課程のさらなる発展を、『50年の歩み』『100年の歩み』といった記録にまとめられることを希望している。

参考文献

- 1) 国立国会図書館. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I032674370>, (参照2024-07-03).
- 2) 東京農業大学学術情報課程. 東京農業大学学術情報課程1982年～2022年における40年の歩み. 2023年. https://www.nodai.ac.jp/application/files/1016/8144/6709/40_HP.pdf, (参照2024-05-02).

2024年度第2回理事会議事録

日 時：2024年5月15日（水）15時30分～16時30分

場 所：Zoomによるオンライン会議

出席者：長塚隆・会長、尾崎聖太郎・事務局長、海野かおり、川端幸枝、下田尊久、松下裕、余川浩太郎、上田広子事務局員

欠席者：なし

議 題：

1. 議事録署名人の選任

出席者の確認に続き、本議事録署名人として、川端理事及び余川理事を指名した。

2. 前回議事録の確認

前回（2024年度第1回理事会（メール審議））議事録の確認を行い、異議なく承認された。

また、海野新任理事より、理事就任の挨拶があった。

3. 2024年度理事の担当・分担（案）

事務局より、資料「2024年度理事の担当・分担（案）」について、一部に修正があり、セミナー委員会委員長は、長塚会長が代行するとの説明があった。

なお、ほかの担当・分担（案）については、異議なく承認された。

また、松下理事（前セミナー委員会委員長）より、2023年度セミナー実施について、報告があった。

4. 2024年度（第21回）通常総会資料の確認

事務局より、資料に基づき2024年度（第21回）通常総会資料（議事次第、第1～5号議案）について説明があり、一部を修正した上で、公開することとした。

なお、会長より、依然として赤字決算が続いている現状を見極め、本会全体の運営方法を見直す必要に迫られているとの発言があった。

これを踏まえ、理事各位より、会誌の電子ジャーナル化や事務局体制の見直し等、コスト圧縮策を本年度中に検討し、会員に諮ることが必要との発言があった。今後、本会全体の運営方法について、理事会を中心に検討を継続することとなった。

5. その他

特になし。

議 長

長塚 隆

議事録署名人

川端 幸枝

議事録署名人

余川浩太郎

2024年度第1回編集委員会

日 時：2024年5月20日（月）15：00～

場 所：Zoomによるオンライン会議

出席者：下田尊久委員長、棚橋佳子委員、長塚隆委員、余川浩太郎委員、尾崎聖太郎事務局長、上田広子事務局員

欠席者：なし

議 題： 1. 215号（2024年9月1日発行予定）以降の原稿依頼について

1) 棚橋委員からのご提案（2024年3月30日付メール）

- ・ぶどうとワインの資料展・連動企画 | 甲州市立図書館
- ・農林中金総合研究所

2. その他

特定非営利活動法人

日 本 農 学 図 書 館 協 議 会

2024年度（第21回）通 常 総 会

議 事 次 第

日 時：2024年6月1日（土）午前10時～

開催方法：Zoomによるオンライン総会

出席者にZoom接続情報をメール送信

議案書は、本協議会ホームページのトップページ「お知らせ」（2024年5月25日付）にて会員に公開しております。パスワードはnouto2024です。

URL <http://jaald.life.coocan.jp>

特定非営利活動法人日本農学図書館協議会

2024年度（第21回）通常総会議事録

1. 日 時 2024年6月1日（土）午前10時00分～11時10分

2. 開催方法 Zoomによるオンライン総会

出席者にZoom接続情報をメール送信

3. 正会員（社員）総数 60名

4. 出席者数 51名（うち 表決委任者 42名）

5. 審議・報告事項

5-1. 審議事項

(1) 第1号議案 2023年度事業報告

- (2) 第2号議案 2023年度決算報告及び監査報告
- (3) 第3号議案 2024年度事業計画（案）
- (4) 第4号議案 2024年度収支予算（案）

5-2. 報告事項

- (5) 第5号議案 新任理事選任の報告及び2024年度役員紹介
- (6) その他

議事に先立ち、定款第31条第1項第5号及び同第2項に基づき、議事録署名人として、下田尊久氏（個人会員）並びに余川浩太郎氏（水産資源研究所図書資料館）を選任することを異議なく承認した。

次に、定款第27条に基づき、議長として、福田直美氏（個人会員）を会長が指名し、異議なく承認した。

また、長塚隆会長（鶴見大学名誉教授）より会長挨拶があった。

6. 議事の経過の概要及び議決の結果

正会員（社員）総数60名のうち、出席者数51名（うち 表決委任者42名）を確認し、定款第28条第1項に規定する総会の定足数を満たしており、総会は成立したことを表明した。

(1) 第1号議案 2023年度事業報告

事務局より、資料「2023年度事業報告」に基づき、各項目について説明があり、詳細に審議した結果、異議なくこれを承認した。

(2) 第2号議案 2023年度決算報告及び監査報告

事務局より、資料「2023年度決算報告」に基づき、各項目について説明があり、詳細に審議した結果、異議なくこれを承認した。

なお、監査報告については、監査役の北川正路監事（個人会員）が欠席のため、事務局が代読した。

(3) 第3号議案 2024年度事業計画（案）

事務局より、資料「2024年度事業計画（案）」に基づき、各項目について説明があり、詳細に審議した結果、異議なくこれを承認した。

なお、会長より、中・長期的な視点での今後の運営方法について、議事「その他」にて説明したいとの発言があった。

(4) 第4号議案 2024年度収支予算（案）

事務局より、資料「2024年度収支予算（案）」に基づき、各項目について説明があ

り、詳細に審議した結果、異議なくこれを承認した。

(5) 第5号議案 新任理事選任の報告及び2024年度役員紹介

事務局長より、資料「新任理事選任の報告」に基づき、海野かおり氏（東京農業大学図書館事務部部長）を新任理事として選任したとの報告があった。

また、資料「2024年度役員紹介」に基づき、全役員の紹介があった。

(6) その他

事務局長及び会長より、通常総会に先立って開催された理事会並びに編集委員会において、赤字決算が続いている現状を見極め、会誌の電子ジャーナル化や事務局体制の見直し等、コスト圧縮策を検討し、本会全体の運営方法について会員の理解を得る必要があるとの認識の下、理事会を中心に検討を進めていくことになった旨の説明があった。

また、会長より、この総会で率直なご意見をいただき、これらを踏まえて、検討していきたいとの発言があり、種々の意見交換を行った。

7. 閉会

議長は、以上をもって本日の議事を終了した旨を述べ、閉会を宣言した。

オンラインによる出席者にあつては、出席者の発信が即時に他の出席者に伝わり、出席者が一堂に会するのと同様に適時的確な意見表明が互いにできる状態にあり、終始異状なく進行した。

以上、この議事録が正確であることを証します。

会 長	長塚 隆	印
議 長	福田 直美	印
議事録署名人	下田 尊久	印
議事録署名人	余川浩太郎	印

2024年度第1回セミナー委員会

日 時：2024年7月18日（木）10：00～11：00

場 所：Zoomによるオンライン会議

出席者：長塚隆会長・委員長、海野かおり委員、川端幸枝委員、豊田恭子委員、福田直美委

員、松下裕委員、尾崎聖太郎事務局長、上
田広子事務局員

欠席者：なし

議 題： 1 . 2024年度活動計画について
2 . その他

2024年度第2回編集委員会

日 時：2024年7月22日（月） 10：00 ～

場 所：Zoomによるオンライン会議

出席者：下田尊久委員長、棚橋佳子委員、長塚隆委
員、余川浩太郎委員、尾崎聖太郎事務局
長、上田広子事務局員

欠席者：なし

議 題： 1 . 215号（2024年9月1日発行予定）の
座談会記事について
2 . 216号（2024年12月1日発行予定）以
降の原稿依頼について
3 . 会誌の電子ジャーナル（PDF版）へ
の移行について
4 . その他

NPO法人日本農学図書館協議会では、当面する図書館の課題や日常の図書館員の声など、自由にご投稿していただくことを願っております。ご不明な点は事務局までお問い合わせください。

【問い合わせ先】E-mail : jaald@nifty.com

日本農学図書館協議会誌 投稿要領

2020年5月1日改定

1 趣旨

この要領は、日本農学図書館協議会誌の投稿に関する取り扱いについて定めるものとする。

2 投稿者の資格

本誌に投稿できる者は、農学系図書館の活動に賛同する者とする。

3 執筆及び投稿要領

原稿執筆に当たっては、本要領及び別に定める原稿執筆要領に従うものとする。

4 投稿原稿の取り扱い

- (1) 投稿原稿は会誌編集委員会においてその採否を決定する。
- (2) 投稿された原稿は、原則として返却しない。

5 謝礼

- (1) 執筆者には、原稿が掲載された「日本農学図書館協議会誌」を3部贈呈する。
- (2) 投稿及び依頼原稿の稿料は別に定める。

6 著作権

- (1) 本誌に掲載する著作物の著作権は、日本農学図書館協議会に帰属する。
- (2) 執筆者自身が当該著作物の再利用を希望する場合、日本農学図書館協議会は、再利用が学術研究及び農学図書館業務改善の進展に資するものである場合は、これを認めることがある。
- (3) 第三者から、論文の複製及び転載などに関する許諾の要請があり、日本農学図書館協議会が必要と認めた場合は、許諾することがある。

7 個人情報

編集の過程において入手した個人情報は、本誌の編集刊行に関する活動以外の目的には使用しない。

8 その他

- (1) ホームページに発行した会誌の目次及び本文を逐次掲載する。会員は、発行されたパスワードにより会誌本文を直接閲覧することができる。
- (2) 冊子会誌に掲載する図表、写真はモノクロとするが、ホームページにはカラーで掲載する。

日本農学図書館協議会誌 原稿執筆要領

2023年11月13日改定

1 趣旨

この要領は、日本農学図書館協議会誌の原稿執筆に関する事項を定めるものとする。

2 投稿原稿は、次の要領で作成し提出する。

- (1) 原稿の受付は、随時とする。
- (2) 原稿は、Word形式もしくはテキスト形式を使用し、横書きで10,000字程度（図表・写真は1枚当たり250文字換算）とする。また、図表も原則として、電子化したデータで提出するものとする。刷り上りは4ページ程度を想定する。
- (3) 文中の見出し番号の表記は、1. 1) ①とする。
- (4) 図表の見出しは、図1及び表1とし、図の下および表の上に記したうえで、挿入箇所を本文欄外に指示する。
- (5) 注記もしくは引用文献等は、本文の該当箇所右肩に1)と記し、原稿の末尾にまとめて記載する。なお、記載例は①～③の通りとする。
 - ① 編著者名『書名』（シリーズ名）出版社、出版年（西暦）、引用ページ
 - ② 執筆者名「論文名」『雑誌名』巻号、発行年月、引用ページ
 - ③ 項番は、1), 2), 3)・・・とし、半角片括弧に統一する。
- (6) 原稿には、表題及び英文タイトル、執筆者氏名、所属機関、住所及びローマ字名、所属機関、住所の英文名を添付する。
- (7) 原稿の提出は下記宛てとし、日本農学図書館協議会事務局が受領した日をもって原稿受付日とする。

〒156-8502 東京都世田谷区桜ヶ丘1-1-1

東京農業大学 教職・学術情報課程内

NPO法人 日本農学図書館協議会事務局

jaald@nifty.com

- (8) 執筆者の校正は、再校までとする。
- (9) 「別刷」を希望する者は、校正の際に必要な部数を日本農学図書館協議会事務局に連絡すること。なお、経費（実費）については、本人負担とする。

(編 集 委 員)

委員長 下田 尊久	個人会員
委 員 棚橋 佳子	東京農業大学学術情報課程
長塚 隆	鶴見大学名誉教授
余川 浩太郎	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 本部研究戦略部
事務局 尾崎 聖太郎	日本農学図書館協議会

会 員 頒 布

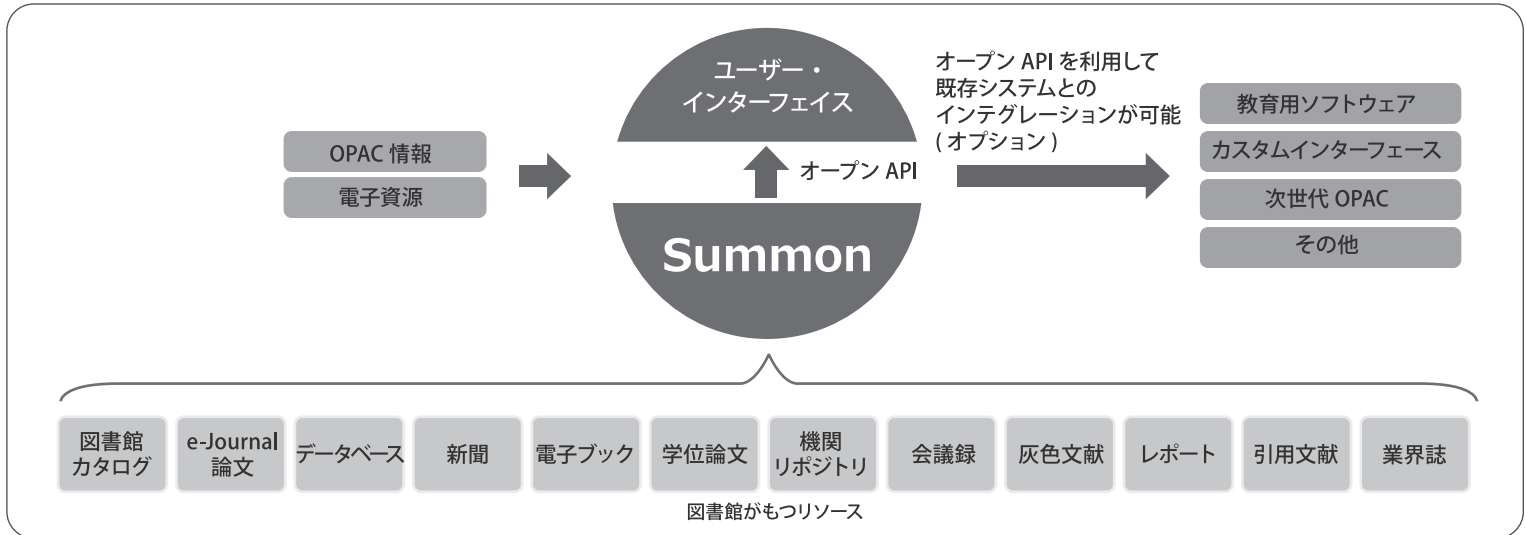
日本農学図書館協議会誌 215号
2024年9月1日発行
発行人 長塚 隆
編集・発行 特定非営利活動法人日本農学図書館協議会
住 所 〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学教職・学術情報課程
TEL&FAX : 03(3408)5077
e-mail : jaald@nifty.com
URL : <http://jaald.life.coocan.jp>
印 刷 所 (株)サン・ブレーン
住 所 〒114-0014 東京都北区田端 6-1-1
田端ASUKAタワー17F

I S S N 1342-1905



図書館が提供する様々な種類の学術資料を 一つの検索窓からまとめて検索することができます

Summon は Ex Libris 社のウェブスケールディスカバリーサービスです。
 グーグルのようなシンプルなインターフェイスから図書館独自の広範囲で信頼性の高い情報へすばやくアクセスすることができます。



POINT 1

すべてのリソースを一度に検索

すべてのリソースをたったひとつの検索窓から見つけることができます。現在のインターネットユーザーのニーズを満たす新しい学術情報の検索スタイルを提供します。

POINT 2

信頼のおけるコンテンツだけを検索

検索対象はすべて図書館のコンテンツです。信頼性が高く、しかも入手可能なコンテンツにのみアクセスすることができます。

POINT 3

瞬時に検索結果を表示

図書館で利用できるすべてのリソースのメタデータをあらかじめハーベスティングさせるので、Google なみの検索スピードを実現します。



図書館システムと連携して 所蔵・貸出情報を リアルタイムで表示

冊子の検索結果には現在の貸し出し状況や保管場所が表示されます。検索結果をクリックすると図書館 OPAC のライブリンクになっています。

availability: 貸出中, 中央図書館所蔵

SaaS 型サービスなので 導入・メンテナンスの 手間がかかりません

Software as a Service(SaaS) で提供されるため、サーバーの設置やアップデート、メンテナンスといった作業に人員を割く必要はありません。常に最新で最適な状態でサービスを利用することが出来ます。

目的の資料への確にナビゲートします

ファセット機能によりフォーマット、主題、出版年などによる絞り込み検索を効率的に実行できます。また、360Link などのリンクリゾルバと連携して該当の資料に確実にたどり着くことができます。

360 Link

お見積もりやトライアルのご相談は...